

個人がリーダーシップを涵養し、発揮するために、組織や家庭といった共同体の存在が欠かせません。なぜなら、リーダーシップは個人の能力にとどまらず、人々との関係性の中で育まれるものだからです。そして、共同体の健全な機能のために意識すべきことのひとつが「自分にとっての中心となる人」の存在です。

倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋は、「暮らしの中のタテの秩序」という論文の中で、次のように述べています。

中心という意味は、立場によって、いろいろに解釈できますが、要はいかなる立場にたつにせよ、その立場における、またはその立場から見た中心は、一つです。一つでなければ中心とはいえません。これが存在者一中心ということ、およそ存在しているものには中心がかならず一つあるものであり、しかもその中心は二つはない、とはつきり言明することを、存在者一中心の原理といえます。

丸山竹秋は、あらゆる存在や集団には必ず一つの中心があり、それが明確であるからこそ秩序と調和が保たれると説きました。この「存在者一中心の原理」は、共同体運営の根幹をなす考え方です。

この原理を企業に当てはめると、社長を頂点に、部長、課長、係長、一般社員という役割ごとの中心が定まっていることが分かります。一般社員にとっての中心は直属の上司である係長で、相談や報告は、社員から係長、課長、部長へと順を追って伝え



## 「存在者一中心の原理」に学ぶ 共同体と縦のつながり

られることで、組織は円滑に機能します。一方、スピード感を意識するあまり、社員が係長を飛び越えて上位者に判断を仰いだり、部長が課長や係長を通さずに一般社員へ指示を出したりすることは、それぞれの中心を軽視する行為であり、存在者一中心の原理に反します。

家庭もまた一つの共同体です。子供から見れば親が中心であり、親から見ればその中心は自分の親となります。しかし、子供を優先するあまり、こうした縦の関係が弱くなっている家庭も少なくありません。また、ご先祖様を敬っていても、実の両親との関係が疎遠な例も見受けられます。純粹倫理の観点から見れば、その状態は、家庭における中心を正しく受け止められていない姿とも言えます。

純粹倫理は、親子という縦のつながりに、夫婦という横のつながりを加えた「ヨコタテ十字の関係」を重要視します。この縦と横の関係が整うことで、家庭という共同体は安定し、安心感のある場として機能していくのです。

私たちが心がけるべきことは、自分が属している様々な共同体において、誰が中心者なのかを明確に意識し、その存在を尊重することです。縦の秩序が整った共同体は足腰が強く、多少の困難には動じません。

一歩ずつ関係性を整えながら、着実に基盤を固めていくことが、健全な組織運営と真のリーダーシップの発揮につながっていくのではないのでしょうか。